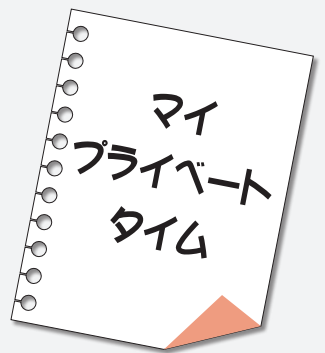


# 音楽・旅・人との出会い

市原市長(千葉県) **佐久間隆義**  
*Takayoshi Sakuma*



## 音楽は心の栄養

私は、子どものころから音楽が大好きで、中学生時代にはトランペットを吹いたこともあります。大学に入学してからは、同級生とフォークソングやジャズを歌ったり、演奏旅行に行くなどしてしまっていました。すっかり音楽に魅了されてしまいました。

社会人となってからも、時間を見つけては都内のライブハウス等に通い、ピアノやサックスなどの素晴らしい音色を楽しんできました。

かつて、私が経営していたレストランでもジャズのディナーショーを開催し、地元の方々に、素敵な演奏を楽しみながら



臨海部工業地域と田園地帯を走る小湊鉄道

食事をしていただいたこともあります。市長に就任してからは、なかなか時間を作るのが難しくなりましたが、時々、心のリフレッシュのために、音楽を聴く機会を設けています。

数ある名曲の中で、私にとって思い出深い曲は、『フォー・ザ・グッド・タイムス』『アンド・アイ・ラブユー・ソー』『ワット・ア・ワンダフル・ワールド』が挙げられます。

これらの曲を聴くたびに、「音楽は素晴らしい、心の栄養!」と感じ、世界が平穏で、子どもたちの笑顔が溢れるよう願わずにはいられません。

## 旅・人との出会い

私は、限られた機会ではありますが、国内外を旅行し、自ら見聞することに努め、出会った人との会話を大切にしています。

特に、海外に行った際に、貧困層の子どもたちが一生懸命に生きている姿を目にすると、心の底から熱い思いが込み上げ、胸が一杯になります。同時に、社会や大人の責任の重さを痛感し、自分たちができることが何かあるのでは、と考えます。

昨年カンボジアの世界遺産アンコール・ワットで有名なシエムリアップ州を訪問し、現地経済界の方々や小学生たちと交流を深めてきました。



アート×ミックスで子どもたちとの演奏に興ずる筆者(左)

次に、これまでにかかわった方々との交流について触れてみたいと思います。

はじめは、渡辺貞夫さんについてです。渡辺さんは「ナベサダ」の愛称で知られる、日本ジャズ界のリーダーです。平成17年に愛知県で行われた日本国際博覧会「愛・地球博」で政府出展事業のメッセージ・ソング『シエラ・ザ・ワールド〜ころつないで〜』の作曲を担当されており、この曲も私にとって、大切にしたい一曲となっています。

この渡辺さんを「市原に招き、子どもたちにぜひ聴いてもらいたい」という思いが実現したのが、「題名のない音楽会」です。



上総いちはら国府まつりで山鉾に乗る筆者

す。昨年度、市制施行50周年記念事業として開催した「中房総国際芸術祭いちはらアート×ミックス」に総合ディレクターとしてかかわっていたことができました。北川さんは、これまでにも新潟県・越後妻有の「大地の芸術祭」、瀬戸内海の島々が会場の「瀬戸内国際芸術祭」という世界的にも稀有な広域での芸

音楽会当日は、渡辺さんのソロ・サックスの演奏と、出身地である栃木県の青少年ドラムチーム、さらに市原市内の小・中学生百数十名による合唱がコラボレーションした大セッションとなりました。最初は緊張気味であった子どもたちも、渡辺さんの気さくな人柄と奏でるサックスの音色と刻まれるリズム、そして何よりも優しい笑顔が、たちどころに子どもたちの心をほぐし、観るものすべての人に伝わり、最高のステージとなりました。続いて、国内外の美術展や芸術祭を多数プロデュースする北川フラムさんがいま

術祭にかかわってきた、先駆者とも言える情熱あふれる方です。

この芸術祭は、緑豊かな田園地帯や里山を走る小湊鉄道と過疎化が進む南部地域を舞台に開催しました。国内外の次代を担うアーティストと地域の皆さまが協働し、アートを媒介として、市民・企業・行政などの連携により芸術祭を開催し、継続的に地域の活性化を図ろうとする課題解決型の事業です。

私は、この芸術祭を通して、将来の市原市を夢と希望に溢れたまちにするための、まちづくりの種まきができ、芽を出したものと考えています。

今後、新しい地域づくりのモデル的な事業として定着し、地域が活性化され、交流人口の増加、ひいては定住人口の増加など、多くの効果が現れることを期待しています。

### 未来に向けて、市原の魅力発信

市原市は、昨年度、市制施行50周年を迎えました。私は、これまでの本市を築いていただいた先人の方々に心から感謝を申し上げるとともに、これからの50年に向けて、すべての市民の皆さまが幸せを実感できるまちづくりを行っていく必要があると考えています。

未来を見据えた事業として、「中房総国際芸術祭いちはらアート×ミックス」を開

催したのも、そのことからです。

この事業の他にも、次代を担う若い人たちが中心となって、豊かな発想力を発揮し展開する「上総いちはら国府まつり」をはじめ、レトロ感あふれる小湊鉄道、沿線の市原ぞうの国、高滝湖畔の美術館、養老溪谷など、市原の立地、自然を最大限活用し、首都圏のオアシスとして、新たな魅力発信に力を注ぐ必要があると考えています。

本市が、今後も持続的に発展していくために、農・商・工・観と行政とが今までの以上に連携を強化し、オール市原で対応することが重要であると認識し、協働によるまちづくりに取り組んでいきます。



南市原の里山に咲く里見の一本桜(与市郎様)